

日本ミルトン協会第4回研究大会 研究発表及びシンポジウム資料

於：フェリス女学院大学緑園キャンパス

日時：2013年12月7日

<研究発表>

1. 政治思想としての神の導き——『失樂園』と『闘技士サムソン』を読み直す——

富樫 剛

マタイ書 10.29——神の許しなくしてスズメが地に落ちることはない——に見られるような、この世への神の介入を説く考えは、1640年代の内乱のなか、戦闘との関連において大いに発展した。内乱は人々の罪に対する神の怒り、戦場における生死や勝敗のゆくえは神の意のまま、というように。あるいは、より攻撃的に、王に対する戦闘は神の怒りのあらわれ、神は王を裁き処刑することを要求している、というように。

本稿は、まずこの「神の導き」の議論を内乱期後半から共和国期にかけての政治思想史に位置づける。この時期の政治的諸思想はジョン・ウォレス、クエンティン・スキナーらがまとめてきたが (John Wallace, *Destiny His Choice*; Quentin Skinner, *Visions of Politics III*)、彼らは、軍を中心に発展した「神の導き」の議論に思想的な重要性を見ない。これが誤りであること、「神の導き」の議論が政治的に極めて重要であったことを本稿は論証する。それは、王の処刑・王制廃止・共和国樹立という国家の大変革をもたらした軍の原動力であった。逆に、ウォレス、スキナーらがとりあげる 17 世紀半ばの非宗教的な諸思想は、みな「神の導き」の議論に対する政治家・思想家サイドからの反論なのであった。

さらに本稿は、共和国期の政治論文にてミルトンが「神の導き」による内乱・王の処刑を称えていることを確認したうえで、この「神の導き」が晩年の詩作品『失樂園』・『闘技士サムソン』でどのように扱われているかを読み解き、考える。『失樂園』冒頭にてミルトンは「神の導きの正しさを説く」というが、実際それは作品の細部においてどのように描かれているか。21 世紀の読者である私たちから見て、それは本当に正しいか。これらのようなことを具体的に再考するきっかけとなれば幸いである。

<シンポジウム>

「ミルトンの交友関係」

(全体要旨)

「ミルトンの交友関係」というテーマを提示するならば、近年刊行された数々の伝記を看過することはできない。2004年、日本ミルトン協会の前身である日本ミルトン・センターのシンポジウムでは、ウィリアム・R・パーカーとバーバラ・ルワルスキーの伝記を出発点として、ミルトン像や作品を再考する試みがなされている。生誕400年にあたる2008年には、アンナ・ピア、ニール・フォーサイス、ゴードン・キャンベルとトマス・コーンズによるミルトンの3冊の伝記が上梓され、それまでの評伝に新たな彩りをそえたことは記憶に新しい。本年刊行された Edward Jones, ed., *The Young Milton: The Emerging Author, 1620-1642* (Oxford, 2013) は、従来の研究書では見られなかった、ミルトンの1620年代から40年代初頭に焦点化したもので、ミルトンの伝記批評はつきることがない。近年の伝記や批評で興味をひくのは、ミルトンをめぐる人物たちを再検討することで、ミルトン像がいまなお変容していることである。

そこで、本シンポジウムでは、ミルトンと交流のあった人物やサークルに焦点をあてることで、ミルトンの人物像や、ミルトンの著作に新たな視座を提供することを試みる。これまで議論されてきた人物やサークルだけではなく、従来のミルトンの批評ではあまり言及されていない人物も含まれるが、ミルトンとの関係について資料の乏しい人物も、ミルトンをめぐる人々の中に布置することで、思わぬ相互関係が見えてくることもあるだろう。各パネリストによる個別の議論を通じて、これまで書かれたミルトンの物語を補うことができると考えている。

オーガナイザー 笹川 渉

1. 「偉大な監督者」ヤングとミルトン

笹川 渉

ミルトンの経歴を俯瞰してみると、ミルトンとトマス・ヤングの交流は、幼年時代から40年代半ばにいたるまで、注目に値するほど長きにわたっている。後には、長老派ヤングとの宗教的な立場の違いも表面化してくるものの、若きミルトンはヤングを師として仰ぎ心酔していた。

ミルトン批評におけるヤングは、ミルトンの家庭教師の一人であったことと、主教制度批判における Smectymnuus 論争で言及されるのが一般的であるが、本発表では、ヤングが単独で著した著述に焦点をあてることで、ミルトンの作品を読み直してみる。ここでは、ヤングの *Dies Dominica* (1639; 英訳 1672) と 1643年2月28日に行った説教、*Hopes Incouragement* を手がかりに、「主の日」をめぐる議論についての2人の関心のあり方に注目する。*Dies Dominica* は、1633年のチャールズ1世による *The Book of Sports* の再版を批判した急進的な著作である。一方、ミルトンもまた40年代の散文で、*The Book of*

Sports をたびたび批判しているが、ヤングとは強調すべき点がやや異なっていることを確認する。ヤングは説教 *Hopes Incouragement* でも「主の日」の過ごし方を説くが、この演説に対してもミルトンの関心は違う点にあったようである。

ミルトンとヤングとの書簡は多数散逸していることもあり、二人のやり取りには憶測に頼らざるをえない点が多いが、1630年代から40年代における政治状況を考慮にいれながら、残された書簡と2人の作品を手がかりに、ミルトンの文学作品に与えた影響を見ていきたい。

Young, Thomas. *Dies Dominica, or the Lord's Day*. Oxford, 1672.

---. *Hopes Incouragement*. London, 1644

2. ミルトンとマーヴェル——パストラルの変容について

加藤 光也

ピューリタン革命時におけるミルトンと13歳年下のマーヴェルとの関係については、最近、歴史学者の Blair Worden による *Literature and Politics in Cromwellian England: John Milton, Andrew Marvell, Marchamont Needham* で綿密に跡づけられている。しかし、詩人としての対比を考えようとする、クロムウェルの共和国政府に参画して以降のミルトンがもっぱら散文による論争家となるいっぽう、詩人マーヴェルの場合には作詩年代が必ずしも確定できずに政治的背景との結びつけが難しくなるという問題が残ってしまう。また、1640年以降のミルトンが一貫してピューリタンの共和主義者であるのに対して、マーヴェルの場合には、最近の伝記が副題に「カメレオン」(Nigel Smith, *Andrew Marvell: The Chameleon*)と掲げるように、その政治的立場にはつねに曖昧さがつきまとう。

そこで今回の報告では、初期において二人の詩人格がよく表れていると思われる *Lycidas* と *Upon Appleton House* を取り上げ、それぞれが Pastoral という形式をどのように大胆に変容させ、あるいは利用しているかを考察し、そこに、後の二人の詩にも見られる、予言的なヴィジョンと黙示録的なヴィジョンとの根も確認できればと考えている。

John Carey ed., *Milton: The Complete Shorter Poems*, 2nd ed., Longman, 2006

Nigel Smith ed., *The Poems of Andrew Marvell*, rev. ed., Edinburgh Gate: Pearson Education Limited, 2007

David Norbrook, *Poetry and Politics in the English Renaissance*, rev. ed., OUP, 2002

Derek Hirst and Steven N. Zwicker, *Andrew Marvell, Orphan of the Hurricane*, OUP, 2012

3. 共和制の終焉—ヘンリー・スタップとミルトン

小林 七実

共和制理念が最も活発に論じられた時は皮肉にもその終年かもしれない。1659年1月

27日リチャード・クロムウェル [以下リチャード] の議会召集から1660年4月4日ブレエダ宣言まで約1年3ヶ月、オリバー・クロムウェル [以下クロムウェル] 護民官政権下で諸外国宛ラテン語論文以外沈黙していたミルトンは自国と議会宛3つの英語論文を出版する。しかしこの短期間に彼が論文を捧げる議会は全て異なり政権安定の法整備ができないまま終わりを迎える。

リチャード護民官議会にはクロムウェルに政界を追われた残余議会議員—ミルトンと親しいジョン・ブラッドショー、ヘンリー・ネヴィル、サー・ヘンリー・ヴェーンら—50数名が復帰する。議会のもと護民官制に抗し新制度を求める人々の用いる言葉が「古きよき大義」である。4月リチャード議会解散後、5月残余議会が回復すると、護民官制でなく共和制による国家樹立の法を求める声と王制回復を望む王党派と長老派の勢力が激しくぶつかりあう。議会は特に成果を出せないまま10月13日解散し政局は一層の混乱に向かう。ミルトンは上記議会宛、2月に *A Treatise of Civil Power in Ecclesiastical Causes*、8月に *Considerations Touching the Likeliest Means to Remove Hirelings out of the Church* を出版する。

同時期、ヴェーンの庇護のもと盛んに論文を出版したのがヘンリー・スタッブである。シリアック・スキナーが長を務めジェームズ・ハリントンの共和論を議論する the Rota Club で論じ、王党派や長老派から鋭い論敵とみなされ、ヴェーンから厚い信頼を得たスタッブは、この時27歳である。彼は6月に *A Light Shining out of Darknes*、9月に *An Essay in Defence of the Good Old Cause* を出版する。ヴェーン、ミルトンに共鳴し、論文で「優良なジョン・ミルトン氏」と述べ、「古きよき大義」を見解と宗教の違いに最高の尊厳を認める共和制国家と定め論じる。

ジョン・モリルは *The Nature of the English Revolution* (1993) で1640年から1660年の理解に宗教税(10分の1税)を巡る論議の重要性を挙げ、ローラ・ブレースは *The Idea of Property in Seventeenth-century England* (1998) で宗教税論の意味を探る。ミルトンとスタッブの論文の類似性についてはオースティン・ウーリッチが *Yale* 版散文集(1980)で指摘している。本発表では宗教税廃止による国家教会制崩壊を両者が共和制樹立の最重要項目とした点に注目し危急存亡のときに語る2人の声を読み解きたい。

4. MiltonとSt Stephen, Coleman Streetに集う者

川崎 和基

1660年代初めにMiltonとの交友関係で注目すべき人物にNathan PagetとThomas Ellwoodがいる。Pagetは医者でCromwellの従妹の娘と結婚し、Cromwellとも交友があったようで、Coleman Streetに住んでいた。そして、彼はSt Stephenで教区牧師を務めていたJohn Goodwinの教会に出ていた。“the Great Red Dragon of Coleman Street”と呼ばれたGoodwinの聴衆にはSir Morris AbbotやSir Issac Penningtonといったロンドン市長やLevellerであったJohn Lilburneらがいた。Sir Issac Penningtonの息子Issac Pennington the youngerは特にPagetと親交があり、Pagetを通して、Miltonは彼を知ることになる。そして、さらに彼らとの交友の中で、MiltonはQuakerのEllwoodと出

会う。

Goodwin は *Redemption Redeemed* (1651) で彼のアルミニウス主義的救済観を展開している。Milton は特に Paget を通して Goodwin について知ってはいたであろうが、*Redemption Redeemed* と同時期に執筆にかかったとされる *Christian Doctrine* にもアルミニウス主義的救済観が展開されている。しかし、Goodwin の主張とは異なる。

Ellwood は *The History of the Life of Thomas Ellwood, Written by Himself* で Quaker の主張や迫害される様子を描いている。特に、彼自身 Milton に *Paradise Regained* の詩作の着想を与えたとされる記述は Ellwood の慢心こそあれ、Milton との親交を物語っている。

本発表では、Milton と St Stephen, Coleman Street に集う者との関係を扱い、さらに、St Stephen で教区牧師であった Goodwin が聴衆に与えた影響を論じていきたい。また、Ellwood の著作を通して、Milton と Quaker との関わりを再考したい。